

芥川龍之介における西洋古典の受容－「神神の微笑」と「文芸的な、余りに文芸的な」を中心に

(要約)

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期人文学専攻

学生番号：D145255

氏名：Damaso Ferreira Posse (ダマソ、フェレイロ・ポッセ)

本論では様々な作品に触れるのだが、何よりも主な研究対象として芥川龍之介の「神神の微笑」と「文芸的な、余りに文芸的な」の二作を取り上げる。その理由は、両作では西洋古典のモチーフが積極的に用いられており、さらに作品の中で重要な機能を果たしているためである。また「文芸的な、余りに文芸的な」の「三十一 西洋の呼び声」というヨーロッパを強く意識させる文章によって締めくくられることも見逃すことはできない。両作品の分析とともに、作品のコンテクストを探る試みとして明治・大正の日本社会における西洋古典の浸透度や、十八・十九世紀のヨーロッパ文学における西洋古典の役割にも注目する。本研究では主にこの両作を西洋古典をキーワードに分析するが、作品のジャンルごとに分析方法が異なることに留意しておかねばならない。

西洋古典というモチーフは非常に意味の広い概念である。そのため「神神の微笑」では、ハイネの小説『流刑の神々』と比較し、古代ギリシャの神々の扱われ方、古代ギリシャと神道の神々との関係性に限定する。また「文芸的な」の場合では、「三十 野性の呼び声」と「三十一 西洋の呼び声」に絞り、芥川の芸術論に見られる新プラトン主義の影響や、晩年の芥川思想におけるニーチェの「アポロ・ディオニュソス論」の受容、身体美の理想像としてのミロのヴィーナスの存在の三つの課題を中心に論述する。

## 研究構成

各章ごとの内容を具体的に述べると、以下のとおりである。まず第二章では、芥川文学に取り組む際になぜ西洋古典のモチーフが重要なのか、また芥川が西洋古典に関しての知識をどこから得たのか、という二つの問いに答える。周知のとおり、明治以降、日本文学は西洋化することに努めた。その結果、十八・十九世紀の主な欧米の文学作品とともに、プラトンやホメロスといった西洋古典の代表的な作品も日本に積極的に受け入れられ、日本の知的エリートの興味を湧かせた。そのような意味では芥川は例外ではなかった。第二章では、芥川の文庫目録を手掛かりに西洋古典と関係のある書物を調査したうえで、明治・大正時代に西洋の古典文学がどれほど入ってきてどのくらい翻訳されたのかと、西洋の古典文学の普及における欧米近代文学の媒体としての役割を明らかにする。その際、その背景として、明治初期から始まった、日本の古代芸術における古代ギリシャの芸術の影響—法隆寺のエンタシスの仮説など—にも着目する。

第三章では「神神の微笑」、いわゆる文学作品の視点から西洋古典のモチーフのあり方を三つの観点から明白にする。第一に、日本化する三つの西洋の古典「Bacchanalia」の場面と「百合若伝説」そして古代ギリシャの神々を考察する。第二に、芥川の作品の主題である、神々の復活とキリスト教への反発の態度に、ヨーロッパ近代文学の視点から取り組み、それらの意味および位置付けを明確にする。第三に、芥川のインスピレーションであると考えられる、ハイネの『流刑の神々』と「神神の微笑」を比較し、芥川が用いる

西洋の古典的要素が、本当にハイネの模倣に過ぎないのかという問いに答え、芥川の独創性について考察を深める。

第四章では「文芸的な、余りに文芸的な」、いわゆる評論的な作品の視点から西洋古典のモチーフのあり方を三つの観点から明白にする。まず芥川の芸術論と新プラトン主義の関係を浮き彫りにする。山敷和男の研究成果を背景とし、その芸術論を形成する要素を新プラトン主義の視点から分析する。次に彼の思想に見られるニーチェの「アポロ・ディオニュソス論」の影響に迫る。晩年の芥川が展開するニーチェの「アポロ・ディオニュソス論」への批判、またその批判がもたらす矛盾をあぶり出す。最後に晩年に構想された身体美と古代ギリシャの彫刻の関連である。芥川における「官能的な」「ポルノグラフィイ」に近い、ミロのヴィーナスが象徴する美を、身体モデルとして解釈する。

第五章では、以上の論じたことを踏まえ、文芸的かつ評論的な視点から分析された芥川文学の西洋古典のモチーフの実態を明らかにする。そして本研究の目的のところで述べた三点（「芥川文学において西洋古典が果たしている役割」、「西洋古典のモチーフとしての扱われ方」、「その扱い方からわかる芥川の西洋古典の知識の深さ」）をもとに結論を出す。